言葉をもとめての旅

大阪大学工学部　竹本喜一

私は昨年の秋、かけ足で東欧のブルガリアを訪れた。黒海沿岸の風光明媚な保養地、バルナ（Varna）での高分子会議に出席するのが目的であったが、首都のソフィア（Sofia）にも二、三日滞在して、短期間ながら大学を中心とした多くの人達を接触できたことが楽しい思い出となった。東欧の方面には、私は5年前にルーマニアを、また7年前にはハンガリーを訪れており、いずれも国際会議や大学での講演が目的であったが、私なりにいろんな印象深い旅の経路をもち得たことを大きい幸と思っている。

私には、東欧や西欧の国々を訪れるとき、その国ではどんな言葉が話され、どんな外国語が理解されているか、といった言葉の問題が大へん興味がある。一般に欧州では多くの国家にそれぞれ独立した言語があるが、その中にはロシア語、ブルガリア語、ユーゴースラビア語などのように共通したスラブ系の言語や、イタリー語、フランス語、スペイン語といったラテン系の言語がある一方、ハンガリー、フインランド、トルコでは、まわりの国々と全く関連をもたないアジアに近い体系の言語が話されていることなど私には大へん関心のある問題である。これらそれぞれの国や地方では母国語のほかにどんな外国語が、どの程度に受け入れられているのだろうか、そこで話されている言葉について、とくに印象の深い旅の思い出を御紹介してみたいと思う。

ビール（スイス）の町

もう10年以上も前のことになるが、南ドイツのStuttgartの工科大学に留学していたころ、フランス東部からスイス西部へひとり旅をしたことがあった。Strasbourg からはじまってLyon、Genéve とフランス語の地域を数日旅してまわったのち、私はLausanne からスイスの首都Bern へ向おうとしていた。スイスは、言葉をもとめて旅行するときにはずい分おもしろい国で、周知のようにドイツ語、フランス語、イタリー語（くわしくは他にわずかにレトロマン語）の地域にわかれているが、とくに南部の山岳地帯を旅すると、ドイツ語の町があったり、フランス語の町があったりする。この中でスイスの大半を占めるドイツ語の地域と、南部のイタリー語の地域との言語境界は高いアルプスの山々が大自然の障壁をつくっており（ちょうど日本の北アルプスが両側の方言境界線となっているように）、理解に難くはないが、ドイツ語地域とフランス語の地域との境界は、これといった山脈も大河もなく、盆地がひろがっているところが少なくない。Lausanne から汽車で1時間くらいにNeuchâtelという名の町があった。ここは湖のほとりにある、大学のある美しい小さい町であるが別にNeuenburgというドイツ語名ももっておりGenèveやLausanneよりかなりドイツ語がよく通る感じがあった。そこからさらに30分ほどでいよいよフランス語とドイツ語の境界の町ビール（独Biel、仏Bienne）に到

達する。期待をもって半日ほど訪れたこの町は、完全に両国語の境界都市であって、ここでは両方の言葉を町の人々はてんでに話し、両国語を公用語としている珍らしいところであった。"Merci, vielmals"(英語でThank you, very much)というフランス語とドイツ語のチャンポンの表現もこのような町では決して異様に感じないのが、私には大へん印象的であった。

ブラショフ(ルーマニア)の町

数年前、ルーマニアのヤシ(assy)という大学都市で国際会議のあったあと、この国中部の山岳地帯にあるブラショフ(Brasov)という町を訪れる機会をもった。山あいの盆地にあって、その山地にはPoiana Brasovといった景勝地があり、ブラショフの市街を俯観することができる。ルーマニアには、それをとりまく国々と全く関係のない、ラテン系のルーマニア語があり、勿論国全体にゆきわたっているが、そのためこの国ではフランス語が最もよく理解されている様子であった。ところが面白いことに、このブラショフの町とその近郊は、古くからドイツ語の飛地であって、いまでもブラショフは別名 Kronstadtという名をもち、ドイツ語がよく理解されていることが私には珍らしい印象としてうつった。13世紀にドイツ騎士団によって創建されたという、トランシルバニア地方の商工業の中心地であるこの町には音楽学校や、有名な「黒い教会」などがあるが、観光地などの案内はルーマニア語の他はすべてドイツ語で示されているほどであった。第二次大戦後、東欧にあるドイツ語の飛地はほとんど消滅したと聞いていたが、言語の生命がいかに根強いものであるかを見せつけられたような気がした。

ボルゴグラード(ソ連)の町

第二次大戦のとき、最もはげしい独ソ戦のあった都市の一つであり、かってはスターリングラードの名で知られていたボルゴグラード(Volgograd)は、とうとうと流れる母なるボルガに面したすばらしい大都会である。やはり数年前、私はモスクワの科学アカデミーに招へいされた旅のあと、2日間滞在することができた。ここにはママヤの丘と呼ばれる広大な平和記念公園や、ボルガにかかる大発電所、ボルガ・ドン運河などとともに、戦争の傷あとの生々しい穀物倉庫の廃虚が残されている。

2日間の滞在ではとても無理だとは知りながら、私はここへやって来たもう一つの目的をいく分でも果してみようと努力した。それはこの都市のあたりが、はるか以前にはやはりドイツ語の最も東にあたる飛地であることを何かの本で知っていたからであった。しかしインツーリストの職員にはドイツ語を話す人はほとんど見当らず、ロシア語の片言しかできない私には英語を通してしか聞き出すすべはなかったが、こ

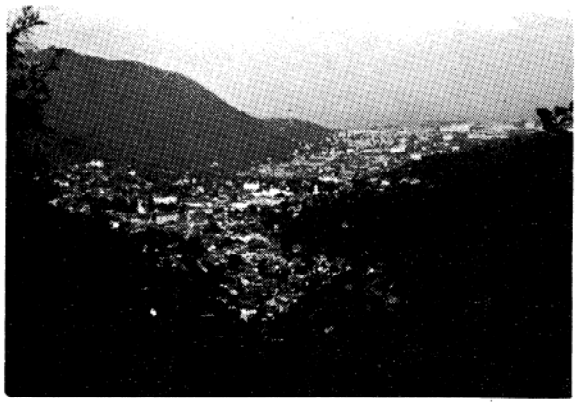

写真1　ブラショフ(ルーマニア).
町の景観

写真2　ボルゴグラード(ソ連).
ボルガ河のほとり

こではドイツ語は市民レベルでは完全に消滅していることを知った。たゞ驚ろいたことには、ホテルのレストランのメニューはロシア語の他は全部ドイツ語で書かれてあり、ボーイさんの話では東独の観光客が多いからだということではあったが、私の知っているソ連の他の都市とは妙にちがった印象があった。

ソフイア（ブルガリア）にて

ブルガリアにはいうまでもなくブルガリア語があり、スラブ語系の中でもおそらく、最もロシア語に近い言葉であるため、この国の人々はロシア語を完全に理解している様子であった。その次にくる第二外国語は、この国では圧倒的にドイツ語である。現在の東欧諸国では外国語としてロシア語とともにドイツ語が最も広く理解されている傾向があるが、そのわりには英語はあまり浸透していない。ソフィア空港でも英語を話す人はほとんど見付からず、市内の大きいホテルでも探すのに苦労する状態であった。私の経験では、東欧諸国ではドイツ語で充分たのしい旅行ができるので、この方面での学会や大学訪問などにも多くの人が積極的に出かけて頂ければと願っている。

写真３　ソフイア（ブルガリア）
アレキサンダーネフスキー寺院

語源の地への旅

ドイツやオーストリアを中心とし、中部ヨーロッパにHallとかHalle とか、あるいはそれに類した地名が多く存在しているが、これらは岩塩に関連のある土地であることを、かってドイツ人から聞いたことがある。ハロゲン（Halogen）という言葉を思い出して頂きたい。そういえば日本でも丹生という地名（人名もあるが）が中央構造線に沿って近畿から四国、九洲方面に連らなって存在しているが、これは水銀（丹）を産する鉱脈と一致しているという事実も興味がある。

私は将来もし機会があれば、マグネシウムや磁石（magnet）の語源の地、ギリシアのThessaly地方のMagnesiaや、ストロンチウムの発詳の地であるスコットランドの寒村、Strontian、さらに稀土類元素イッテルビウムの語源の地、スエーデンのYtterbyの町などにも訪れてみたいと思っている。